



自己紹介

大淵由貴（おおぶちゆき）1988年東京都江戸川区出身。千葉大学法経学部総合政策学科卒。大学時代は環境NGOの活動に従事、また休学してバンクーバーでワーホリを経験。卒業後、電機メーカーで5年間営業を勤め、会社を退職して青年海外協力隊としてマダガスカルで活動中。

貴重な鶏肉

任地では鶏肉の量り売りはほとんどしておらず生きたまま一羽を買うのが基本です。たまに農家さんに頼んで一羽を捌いてもらい買っています。先日、いつもの農家さんに頼んだら、妊娠中は殺生ができないと言われてきました。少し慣れてきてしまっていた家畜の殺生ですが、命をいただいているということを改めて認識する良い機会となりました。



養豚支援活動

～子豚・化学飼料の購入費用出資→利益を折半～

昨年12月から養豚支援活動を試んでいます。農家さんから、「豚を育てる場所、餌（野菜やもみ殻など）はあるが、子豚と化学飼料の購入費用が足りない。利益を折半するので初期費用を支援してもらえないか。」という相談をされたのがきっかけです。ただお金を貸してくれという人が多いなか、「投資」の相談は初めてだったのでやってみることに。かかった費用は全てノートに記載してもらうことを約束しました。

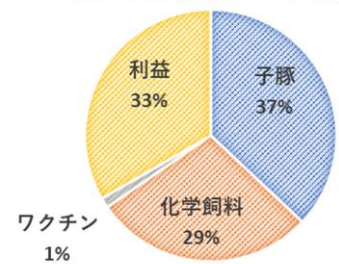
費用合計 360,000Ar (11,160円)
 内訳
 子豚 200,000Ar (6,200円)
 化学飼料 153,000Ar (4,743円)
 ワクチン 7,000Ar (217円)

販売金額 540,000Ar (16,740円)
利益 180,000Ar (5,580円)

原価率：66.7%
 利益率：33.3%

飼育期間 5,5か月
 (1Ar=0.031円 2019年4月24日時点)

利益と費用の内訳



上：子豚、右：販売直前の豚（成長しました！）

結果は上記のようになりました。利益はあるものの課題は色々あります。

- ・販売利益だけで**次の子豚を購入できない**（長期的な計画が必要）
- ・豚が病気になったり、**死んでしまったときの取り決め**をしていなかった
- ・今回は豚肉販売業者に一匹買いとってもらったが買い手がみつからない場合、自分たちで捌いて豚肉を販売するので**売れ残りリスク**がある

上手くいけば農家さんにとってはまとまったお金が手に入りますが、失敗した時のリスクを負えるほど資金力がありません。残りの任期で私自身ができることは少ないですが、少しでも養豚を続けられるように長期的な計画の話もしていきたいと思います。

イースター休暇の過ごし方

～親戚一同でピクニック～

キリスト教徒の多いマダガスカルではイースター（復活祭）は国の祝日になっています。学校も2週間ほどお休です。今年は同僚の親戚一同（約20名！）に混ぜてもらい、町の中心から5kmほど離れた原っぱにピクニックに行きました。到着したら子どもたちは近くの茂みからグアヴァを収穫。皆のおやつです。それから川で魚を釣って（晩御飯）、散歩して、賭けビンゴ。お昼ご飯（お米と鶏肉・豚肉の煮込み）を食べて、昼寝して、賭けトランプをして、日が沈む前に帰路につきました。

（写真右：タープの下で昼寝中♪）

